

タイリク先生の
えっちな資料





「……………」

カリカリ、カリカリカリ。
部屋の中でペンを動かす音が響く。
彼女は親友のタイリクオオカミ。
漫画を描いて生計を立てている漫画家、作家である。

自分は作画資料(?)として度々家に招かれるのだが
今回も同じ用件だった。
ただ、あまりに長引いているのでたまらず彼女に視線を送る。



「あ、ごめんごめん、集中しちゃうとつい、ね♪」
漫画家だけあって集中力が凄いのはいいが、少しはこっちのことも考えてほしいものだ。



「えーと、じゃあ次はね…」
もう次か・・すっかり彼女のペースに乗せられている。



何を言い出すのかと思えば・・・ちんちん！？

「次は……………ちんちん」
「…ん？今なんて…ん？」
聞き間違いでなければ確かにちんちんと…



「いいからちんちん出して、ね？」
ちよ・っ・っ！?
弁解を求める前に服を脱がされ、己の愚息が眼前に現れる。



「フフフ・・・」
「ゴシゴシとペニスをしごきながらタイリクオオカミが笑う。」
「えーっと手コキ？だったかな」
「言いながらも手は止めない。」



「ビクビクしてる・・・こんなにも雄々しいモノだとは思いませんかったよ」
「これは資料・・・作画資料だから・・・」
段々と快感が込み上げ、ついビクついてしまう。

「気持ちいい・・・？痛くないかい？」
それどころか、上手い・・・
手袋の感触、はだけてあらわになっている胸、
それに少々きこえない手つきが合わせり
質問に答える間もなく快感の波が押し寄せてくる。

シコシコとこする音に、徐々に水音が混じり始めていた。





「そろそろ出そうかな・ ・ ・ ? じゃあこのまま・ ・ ・ 」
「いきながら手つきにスパートをかけてくる。 ・ ・ ・ ♡」

うっ ・ ・ ・ ・ ・ ! ! !

グチャ♡
グチャ♡
グチャ♡

ズチャ♡

Mr. M

吹き出すように精液が吐き出される。
胸が、顔が、白く染まっていく。

んっ



ドクドクッ♡
ドクドクッ♡
ドクドクッ♡

ドクドク♡



「気持ち良かった・?♥」
そう言いながらこちらに優しく微笑みかけてくるタイリクオオカミ。
熱のこもった吐息、赤く染まった頬にかかる精液の白い
コントラストがとても妖艶にみえて・・・



また下半身に血が集まるのを感じた・・・。

「おや・・・？」
出したばかりだというのにまたムクムクと大きくなるソレを見て
彼女がふふつと笑う。
「じゃあ次は・・・」



「お掃除しなきゃ、ね♥」
胸と顔に付いた精液を舐めとり、そして・・・

「はむっ・・♡」
「おもむろに精液でドロドロになったペニスを口に含んだ。」
「ふほいあひ・・・んっ・・♡」

ジュルル♡

ジュパッ♡

艶めかしい水音がする。



まるで生き物のようにペニスに絡みつく舌、吸い付く唇。
思わず声が出そうになる。
「ぬるぬるでてひは・・・おいひ・・・」
ご満悦そうにつぶやく。

竿の先端から根本までを唾液と粘膜がにゅぷにゅぷと包み込まれる。
舌はカリや鈴口、裏筋をねっとり責め立てており、下半身全体が
快感に包まれているようだった。





「だひて・・・だひて・・・
うっ・・・」

腰砕けどころではなかった。今まで味わったことのない感覚により
「ん・・・」
はやくも射精感が・・・正直もう出そうだった。
それに気づいたのか、舌と口とがより激しく絞るようにペニスを責め立てる。



ビュルルツ！ビューツ！！
彼女の口の中にたちのぼってきた己の欲望を吐き出す。
精液が口内を満たしていく・・・すごい勢いだっただ。

受け止めきれない分が口からあふれ、顔に飛んでいた。
それを愛おしそうにくっつく・・・んくっ・・・と飲み込んでいく彼女。
同時に竿への責めを緩めることなく続けている。
これには思わず反射的に下半身が反応してしまった。

ビューツ♡

ビューツ♡
ビューツ♡
ビューツ♡
ビューツ♡

ビューツ♡







もう精液で満たされつくした口内にさらに射精。
「んぶっ・おいひ・せいえきおいひい・」
口から精液を溢れさせながらもそれを味わうタイクオオカミ。
たまらなかつた。



「原稿もあるしまた明日、ね・・♥」
その日はそれで別れた。

「さすがにそろそろ限界そうかな？」
日に三度、それも味わったことのない体験をすれば無理もなかった。
愚息もしなしなである。

次の日、会うなりいきなり
「ちんちんだして！」
といった具合でズボンを脱がされ、事に及ぶことになった。

「ふふふ♥パイズリっていうんだって?これ」



たふん♥

ぬふん♥

「ヒトはえっちなものを考えつくねえ♥」
豊富な胸でペニスを挟み込み、動かす。
しっとりとした汗ばんだ双丘がペニスを緩やかに刺激していく。

「柔らかさとほど良い弾力が何ともいえない感触を生み出していた。
「キミのおちんちん、硬くてすごくあつい・♥やけどしちゃいそうだ♥」

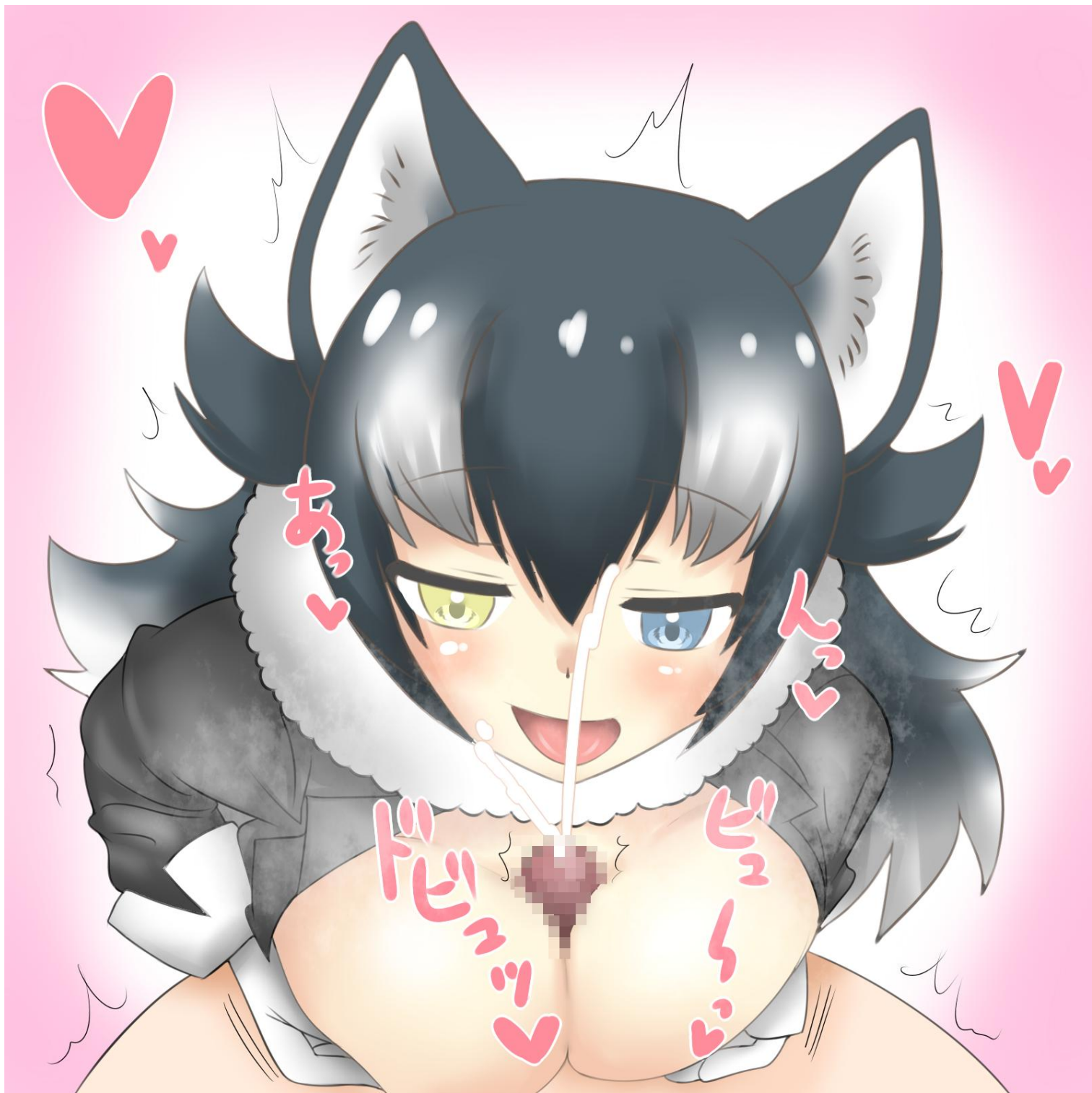
はっ♥
はっ♥
たはっ♥
ぬるん♥



直接肌と肌とが接しているせいか体温が上がり汗をかいてきた。
汗ばむ谷間にペニスから出ていたカウパー液が混ざり、さらに滑りを良くしていく。
「ふふ♥もうそろそろかな？」

「キミってイイ顔するね♥」
見透かされてる！?ともかくもう限界だった。腰が浮く。
「私のおっぱい・・♥キミので・汚して・・♥」





「んあっ・♥あついつ・・♥」
汗とカウパーとでぬるぬるになった胸元から
ビューツとビューツと精液が発射された。

それらが胸とその谷間、顔、口へと勢いよく飛んでいき、
それぞれを白く染めていく。



「こんなにも濃くていっぱい」
「胸も顔もどろどろだよ」
彼女も満足げだ。♡♡♡

「じゃあ次は本番、しようか・・・」
彼女はそう言うなり服を脱ぐとこちらを押し倒し、
自らの秘所にペニスを挿入した。♡



はーっ♡
ドォォ...♡



ズブズブツツと膣内に包まれるペニス。ろくに前戯もしていないにもかかわらずねっとりトトロトとしていて熱く、きつく締め付けてくる。



「ツツ〜♡」
彼女が声にならない嬌声をあげた。

そのまま一心不乱に腰を上下させ、ピストン運動する。まさにつけもののようだった。接合部からのグチュツ♡バチユツ♡という粘着質な水音、動きに合わせて揺れるたわわな双丘。



その全てが情欲を駆り立て、本能的にペニスを熱く硬くしていく。

「ああ・んっ・♥きもちいいっ・♥はっはあ・♥
嬌声と動きがより激しくなっていく。」

「ああ・♥んっああ・♥あんっ・♥」



「イク・♥イツちやうううう・・・♥
こちらもう射精寸前だった。」

膣内のうねりがさらに刺激をもたらし、
ペニスが脈動する・・・



ゴム無し生で膣内の奥にペニスを押し付けてこれでもかと射精する。
最高の快感と征服感だった。

「なかに・・・♥でてる・・・♥びゅーびゅーって・・・♥」



その後、作画資料の為というのは嘘だということと
関係を深めたい故にえっちなことを強行した旨を伝えられた。
「いやあ、キミってば全然好意に気づかないものだからつい、ね・・・♡」

「あ、ちなみに危険日だから♡責任とってくれるよね？」
ぎよっとしてしまったが元からそのつもりだ。
うれしそうにクスツと笑うタイリクオオカミ。
そんな彼女には、今の僕の顔は最高にイイ顔に見えていることだろう。



えっ
ちり
な資
料の
先生の

おわい

